



明治の魚沖仕



笠岡/西浦



布東の道標

とと道トレイル探索



雨の吹屋

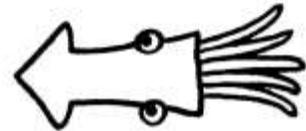
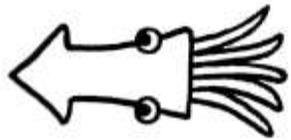


とと

8つのとぼれ話

備中とと道トレイル

吹屋



金捕

®2020~

「とと道」探索8つのこぼれ話

平成も終わろうという2016年初夏、ふとしたきっかけで笠岡＝吹屋を結んでいた「とと道」の調査、整備が始まりました。

その結果、今では50年ほども閉ざされていた全ルート60kmを気楽に（？）歩けるまでになりました。

これは「とと道」沿道の多くのメンバーの努力のおかげです。

そこで、2021年度の推進協議会総会では、この間にどんな新情報、発見があったのかを4地域のメンバーがとりまとめて報告しました。このたびその内容をHPにも掲載いたします。

何故このルートが「とと道」と判断されたのか？沿道の各地域はどんな機能を果たしていたのか？そんなことを知ればウォークはより楽しくなります。

コロナ禍終了後は是非またご一緒に歩きましょう。

「とと道」南部ルート探索のきっかけ

矢掛メンバー（当初わずか2名）は2016年(平成28年)に高梁川流域学校(本部倉敷市)の事務局から笠岡＝成羽のとと道ルートの情報提供を依頼されました。

このため、10年ほど前から笠岡＝高梁のとと道ルートを探索していた「とと道」の先達とも言える笠岡市走出在住の森山上志氏(推進協議会現会長。2010年に「高梁川68号」に笠岡＝美星・三山のとと道探索報告を寄稿)グループの指導で探索を開始しました。

この際笠岡メンバーは「とと道」は高梁経由ではなく、吹屋へ直接通じていたことを初めて認識することになりました。

① 「とと道」 南部ルート探索

一助実地区ルート特定

笠岡メンバーは、山陽自動車道橋脚下から大井の三方位道標までのルートは、吉田川沿いに北へ進むものと思っていました。

しかし、地元の人によれば山が川に迫り適切な道が無く、橋脚下から、助実（すげざね）地区へ急斜面を登り、山越えをしていたということでした。現地調査で初めてその話を聞いた当時は急斜面に雑草が生い茂り、とても登れる状態ではありませんでした。

ところがほどなく地元の人々が大掛かりな草刈を実施、かつての道の跡が現れました。その後この急坂の途中に右側から合流する、山腹を斜めに登って来る道があったとの情報もありました。そちらが本来の道だとも思われたのですが、その道は山腹のさらに深い藪に埋もれており、草刈りをするには膨大な労力が必要と判断され、吉田川からの急坂を暫定的に「とと道」ルートと特定しました。

ともあれ、この結果「とと道」は助実（すげざね）地区を通ることになりました。そこには荒神社、御子神（みこがみ）様、常夜灯（今でも毎晩燈明が灯される）、西国33番観音と多くの神様が勢揃いしており、しかも大井盆踊り発祥の地でもありました。以来、笠岡メンバーはそこを単に「助実地区」ではなく「助実地区**聖地**」と呼ぶことにしました。

ここから大井方向に下る途中で右手に50mばかり寄り道すると、住宅街の先に突然空き地が現れます。縄文時代後期（4千年前）の助実貝塚です。驚くことにハイガイや蠣の化石（本物？）が今でも辺り一面に散らばっています。百年ほど前にはここから埋葬人骨が発見されたということで、大昔の祖先の姿も偲ばれ、正に聖地と呼ぶにふさわしい地域です。

助実地区ルート特定



吉田川から助実への急坂



助実貝塚

吉田川沿いの土手道



当初は緑の線と考えていたが実際は赤線だった。



西国33番観音



常夜灯



荒神社



助実地区聖地

② 「とと道」 南部ルート探索 ー岩神池周辺ルート特定

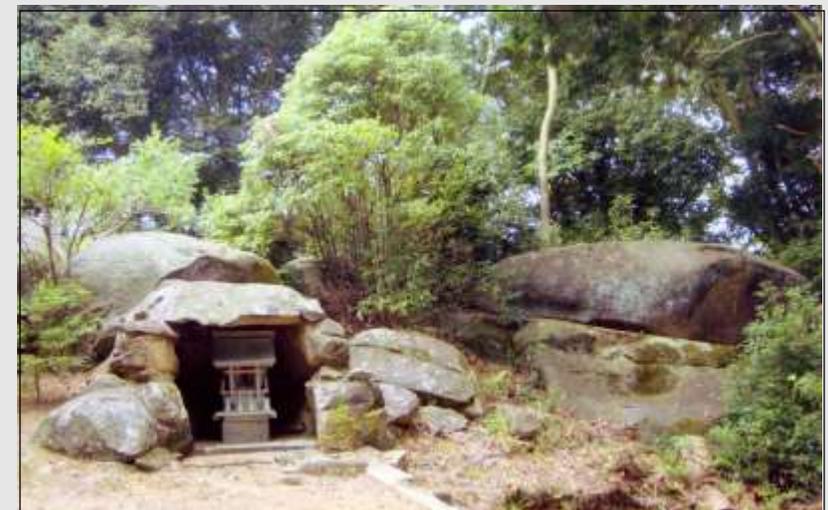
大戸上のバス停から北のルートは地元の方の案内や情報から、当初はエスポール病院から東の上長迫の公会堂方面経由で走出と新賀の境界の尾根上を辿る車道に出て、北上すると考えていました。公会堂に有る道標や（道路工事で移転された道標）、周辺の祠なども参照しての推測でした。

しかし、地元の方からの聞き取りを更に続けてゆくと、大戸上から真っ直ぐ北上し、岩神池に至り、岩神様を経て尾根を辿る車道を登ってゆくルートが最短距離であり、それが「とと道」だということも聞き、その指摘に従いました。

現在、岩神様から上長迫を通る道の一部に草が繁茂し、獣避けの網も張っており、歩行には注意が必要です。



岩神池畔



岩神様

③ 「幕府巡見使と魚仲仕が通った道が交錯する地域」 —古代の丘スポーツ公園ルート整備

「とと道」はときわヴィレッジ入り口からほどなく、深々とした「ふるさとの森」の中を辿り、往時の雰囲気を感じます。しかし、1kmほど北へ進むと真下にどんぐり球場が広がる崖の上に出ます。その先の稜線を形成していた山がそっくり削りとられ、底地が平成12年に野球場に生まれ変わったのです。ルートはここで右に折れて崖の縁を辿り、先の方の長い階段で野球場の横に下ります。

そこから先は広々とした古代の丘スポーツ公園の中を自由に歩けますが「とと道」の雰囲気はありません。そこで最近、崖の上から右ではなく、逆に左の林に入り、山の掘削の折りに辛うじて残った斜面を下るルートを整備してはどうかという構想が生まれています。現状では雑木が繁り歩きづらなのですが、若干の伐採作業で「とと道」にふさわしいルートが整備できそうな環境です。今後、関係者の理解を得たい構想です。

スポーツ公園の北端には「木々名（ききな）峠」という場所がありますが、江戸時代の巡見使達はこの峠を越えて笠岡方面へ向い地域の巡見をしていました。「とと道」と「巡見使の道」はここで交錯していました。



ふるさとの森からスポーツ公園への下り



野球場の脇



ききな峠看板

④ 「瀬戸内海沿岸から吉備高原へ」 -矢掛「まぼろしの県道」探索

矢掛メンバーは高梁メンバーに成羽＝吹屋を、笠岡メンバーに笠岡＝美星の「とと道」をご紹介いただき、ようやく全ルート of の概要をつかみました。その結果、矢掛地区の課題は宇内から毛野に至る、地元民から「まぼろしの県道」と呼ばれていた山中のルートがどこを通過していたかの特定にあることが分かりました。このため、様々な現地地図、航空写真等を参照、4つの候補ルートをあげ、2017年1月～2月、4回にわたる現地調査を実施して、その位置を特定しました。以下、その経緯を紹介します。



幻の県道4つの候補ルート



ルート特定のきっかけとなった布野の二股道標

北東面：
右 小田矢掛
左 舊道
為亡牛

北西面：
大正十五年六月二十日
(1926)

この道標は毛野の台地の南外れの二股の位置に有ります。北東面に左右の道が「小田矢掛」、「舊(旧)道」と刻字されています。大正15年の時点で矢掛へ向う山中の旧道(とと道)は、今少し広く傾斜の緩い新道に変わったことを示しています。



最終特定ルート



まぼろしの県道登り口

「とと道・矢掛まぼろしの県道」 探索

2017.1.12 (二股道標発見) 宇内と毛野の間には竜王山 (353m)があります。昭和4年の地図には竜王山の東西に4本の小道が明記されており、そのルートそれぞれ実際にトレースすることにしました。

結果、最初の調査で②ルートの毛野側の笹藪の底から「まぼろしの県道」特定の鍵となった貴重な道標が偶然発見されました。これを「毛野の二股道標」と名付けました。

その後②ルートを宇内側から偵察してみましたが、途中から水平道に出てしまい、毛野へと登るルートは発見できませんでした。

2017.1.18 (山中放浪) 二股道標の発見で幻の県道は特定できたと思われましたが、地元の猟師から幻の県道は③ルートだったとの情報が入りました。このため、②ルートを上から下って探索する計画を変更、③ルートを下ることにしました。

ところが山中深く入り道を失い、南ではなく、遠く離れた東へと下ってしまい探索は失敗。遅れたメンバーの1人があらぬ方向へ迷い込み、30分ほども待つというあわや遭難というはめになりました。



毛野の二股道標発見の瞬間



竜王山東面の倒木帯

「とと道・矢掛まぼろしの県道」 探索

2017.1.25（強行突入） 前回の失敗に懲りて②ルートをも野側から下ることにしましたが藪が深く、急斜面になかなか入れません。西側寄りを強引に下り、森の中に入ると藪はやや下り易くなりました。ほどなく、山腹を水平に横断する2mほどの巾の、初回に登ってきた山道に下り着きました。

そこから、北へ登る道があるかどうかを探りながら東に向いました。途中、藪の底にうっすらと道状の凹凸が見える地点を発見。次回はそこを登って調査することになりました。

2017. 2.6（上下貫通） 探索は4回目となり、前回うっすらと道状の凹凸が見えた北へと登る地点にスムーズに到着、笹藪を刈りながら北へと登りました。当初さほどでもなかった笹藪は登るにつれ密生し、身一つ通れる程の幅まで刈り払っては体を押し込むといったことを幾度も繰り返しながら前進しました。

上へ上へと刈り続けて1時間、最後の笹を刈り払うと、見事、前回下るのを諦めた地点に出て②ルートの上下がようやくつながりました。その後数回にわたり道幅拡幅のための大掛かりな伐採を行い、ようやく自在に歩けるようになりました。



上下ルート貫通の瞬間。同行取材の矢掛放送アナウンサーが思わずピースポーズ

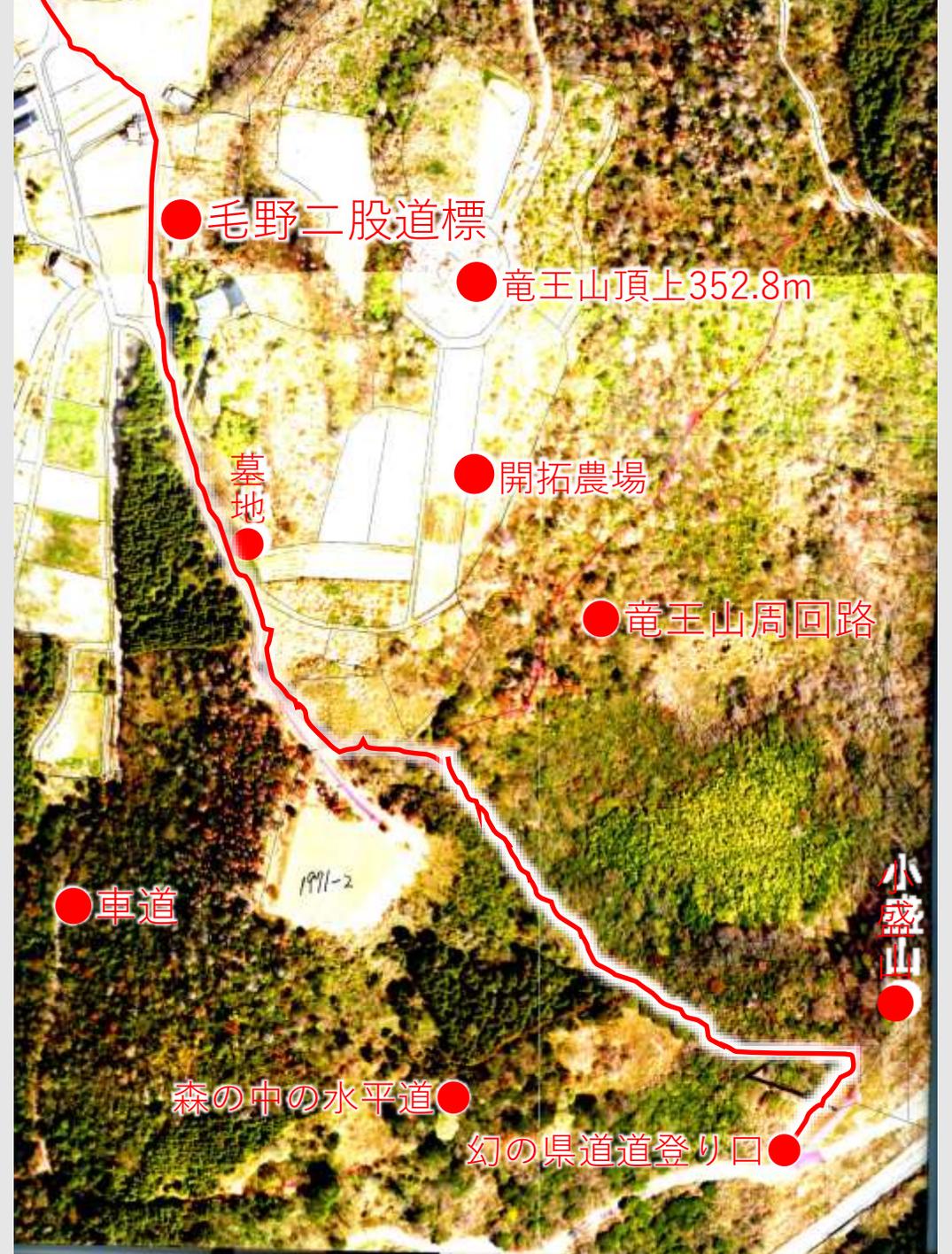
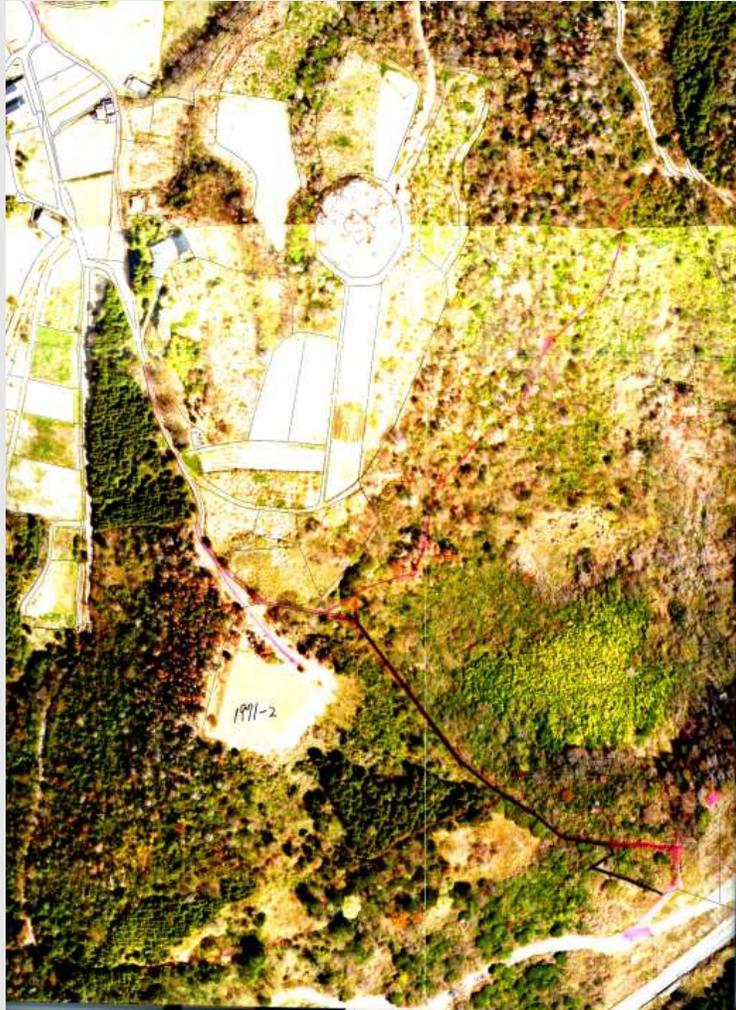


整備された②ルート核心部への急坂。



上下ルート貫通後、森林組合の助力を得て藪の伐採を行い、自由に歩けるだけの道幅を確保しました。

幻の県道空中撮影写真：さる筋を通じて入手した戦争直後のもので①～③の探索候補とした道がうっすらと見える。情報はある所にはあると納得。



⑤美星「代表的とと道仲継所」探索

2017年1～2月に宇内～毛野間のルートが確定、これで最後に残った美星地区ルート探索の意欲が湧き上がりました。

ところが、同地区はとと道のほぼ中間に当たり、ここから吹屋、高粱、地頭等各地へのルートが派生しており、地区内に5ヶ所もの魚仲仕の仲継所がありました（名畑、尾崎上、吉田布郡、布東、宇戸谷等）。他にこうした地区は見られません。

このため、1976年(昭和51年)に発行された美星町史には既にとと道についての詳細な報告がなされていました。そこで美星町文化財同好会メンバーに依頼、美星＝成羽ルートを案内していただきました。町史には仲仕の仕事についても書かれています。

「仲仕が運ぶ荷の重さは、10貫から12貫位で鰯（ぶり）が大なら4本、中6本ぐらいだった。新見へは小で10本とほぼ決まっていたようである」。

「だから、オウコ（担ぎ棒）の選択はきびしく、杙目で、よくしわり、リズムに乗って踊るようになり、重みが肩にかからないものを用いた。仲仕の日当賃金は明治25年頃に一般の日雇賃金が4銭のとき、その5倍以上であったといわれている」。

美星「代表的とと道中継所」探索



5軒の中継所
 名畑、尾崎上(おさきかみ)、吉田布郡(よしだふこおり)、布東、宇戸谷



布東の道標から見た昭和40年代の風景。黄色○の中が往時の中継所。



布東の道標から見た現在の風景。黄色○の中には中継所は無い。

吹屋往来「とと道」北部ルート探索のきっかけ

2013年（平成25年）、高梁メンバーの小見山氏は高梁川流域学校（本部倉敷）の依頼を受け、北部ルートの調査を開始していました。

「とと道」の痕跡をたどるために高梁市宇治町在住、信原秀清氏に相談すると、昭和20年～25年頃宇治から成羽町の親戚へ行くたびに徒歩で利用していた道があったと聞き、ルートの案内を願いました。

合わせて「岡山県歴史の道調査報告書 第7集」に掲載されている「吹屋往来」についての記事を参照、この地域では「とと道」は「吹屋往来」という、吹屋産のベンガラを成羽へ運んでいた旧来の道と同じ道であることが分かりました。

⑥吹屋往来「とと道」北部ルート探索 —窓坂はいずこに

小見山氏は信原氏と共に成羽町東枝より、2万5千分の1地形図とコンパス+なた+ノコを頼りにひたすら北へ向いました。その結果、「吹屋往来」の一部、つまり「とと道」は近年新設された「大型農道」に吸収され、寸断されてしまっていることが分りました。

地図を頼りに稜線を登りつめ、水道記念碑の上の360m三角点まで達しましたが、吹屋往来「とと道」の中で一番の難所といわれていた「窓坂峠」を発見できませんでした。

実は峠はこの三角点の西側約50mほど下に有ったのです。その後、「成羽郷土の歴史を語る会」（当時会長 官尾雅彦氏）から正しい情報をいただき、窓坂峠を確認できました。一帯の地権者であり、以来、とと道整備に尽力いただいている成羽の徳森氏ともこの当時出会うことになりました。



成羽町東枝より360m
三角点への登り口



牛供養碑



360m三角点



360m山頂付近から
「かぐら大橋」を望む



窓坂



窓坂西の大型農道との合流点

⑦ 映屋往来「とと道」北部ルート探索 — 宇治後谷への3つの道

「とと道」は山坂をいとわず兎に角一直線に北を目指す最短距離を辿るのが原則です。どちらに向うべきか迷った折りにはこの原則に従うと道が見つかるケースが多々ありました。

宇治の後谷へ向うルートはその好例でした。地図上では明確に北へ向う道が示されているのですが実際に歩くとその道は藪の中に隠れており、後谷への急坂の手前で東西どちらかに迂回せざるを得ません。東に行けば松原から来る県道305号線へ、西に行けば郷中の北外れに下り着きます。

では、何故真っ直ぐ北へ向う道が通れないのか？2020年4月の探索で分かったのですが、実は途中までは古い踏み跡が有るのですが、後谷へ下る最後の急坂が、伐採された杉の倒木で埋め尽くされていて通過できないのです。いずれ倒木が撤去される（する）までは当面、東西いずれかの迂回路を通るのが安全と判断されます。

吹屋往来「とと道」北部ルート探索—宇治後谷への3つの道

2016.10.23（初めての吹屋往来） 矢掛、笠岡メンバーは高梁川流域学校主催の成羽～吹屋ウォーキングに参加、高梁の小見山氏と初めて出会い、そのあとを必死で追って東側の迂回ルートを下り、五葉峠に出て、宇治に至りました。この折は歩くのに精一杯で地図とルートを照合する余裕などは全くありませんでした。

2020.2.26（疑問） 3.8開催予定の一般公開ウォークの事前下調べと言うことで車で宇治に入り、4年前に下った道を逆から辿ってみました。ところがこの一帯では詳細地図から分かる様に山道が複雑に錯綜しており、途中で方向を失い、なんだか地図と違うなという疑問が湧いただけで前回同様不得要領のままに終わってしまいました。

2020.3.15（気付き） 一般公開ウォークはコロナ禍により中止、このためとと道ルートが判然しないと考えるメンバーで再度、現地を調査しました。結果、事前に現地の徳森さんが大掛かりな草刈りをして下さった西側の迂回路を辿り郷中方面に下りました。その里山との合流点で「右なりハみち 一リ半 左まつやまみち 三リ半／北谷屋（宇治の中田邸の別名）」と刻字された小さな道標に出会いました。おかげで、この道はまつやま道であり吹屋往来／とと道ではないことに気付きました。そこから北に向い、後谷に下り着きました。途中地元の人に尋ねると「とと道はあの山の中を通っていたんじゃないかな」と東側の山を指したのがいたく気になりました。

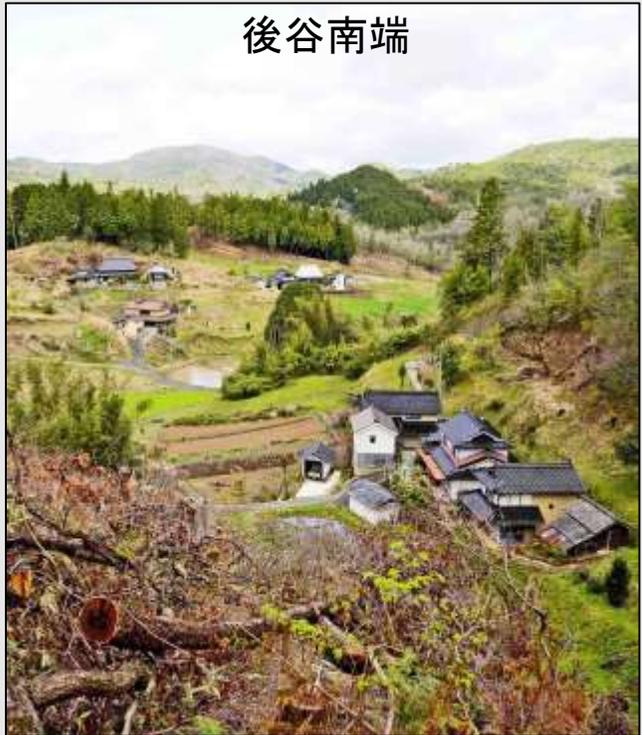
2020.4.20（確認） 4回目となるこの日は、東の迂回ルートを経由して一旦宇治まで行った上で後谷に入り、谷の南端にある筈の急坂を逆から探索することにしました。

結果、谷の最後の家のおばあさんから「嫁に来た昭和30年頃には家の正面の山道を大勢歩いて宇治の小池百貨店に行ってたよ」との情報を得ました。「そうだ、それこそがとと道だ」と直感しました。ワクワクしながらその坂道に向いましたが、坂の取り付きは2mほどの石壁になっていて道はありません。端の草付のがけを無理矢理直登して、その上に残っていた古い山道を登りました。

しかし道はほどなく、伐採された杉の倒木に埋めつくされて、とても通れない状態になりました。おばあさんが「森が塞がってしまうんで30万円出して杉を切ってもらったのさ」と言っていた場所でした。どうしてこれほどの量を伐採しっぱなしにしたのかと思いながら折り重なった古い倒木を無理矢理越えると森の底の狭い谷筋にかすかな踏み跡が現れました。

これを追って稜線に向うと道はかつて毛野の山中で見た様な一間ほどの巾になりました。倒木をかわしながら20分ほども登ると、突然つい1ヶ月前に辿った西側の迂回路に飛び出しました。振り返るとこの道の入り口は藪に覆われていて、迂回路側からはとても気付きようがありません。10mほど東では東の迂回路につながる道が左に曲がっていました。真っ直ぐ行けば大型農道です。

こうして、地図には明記されていながらどうしても歩けなかった「とと道」が4回目の探索でようやく確認されました。おばあさんの話からすると人が入ったのは30年ぶりのことかもしれません。その後再度この急坂を南側から下ってみましたが、やはり圧倒的な倒木のため通過は困難でした。



後谷南端



五葉峠

305号線との合流点

後谷最南端の家

そこから見渡すとと道と杉の倒木帯

倒木の底に埋もれているとと道

右が東迂回路、左が西迂回路

二股手前の名物廃車

松山往来は左へ

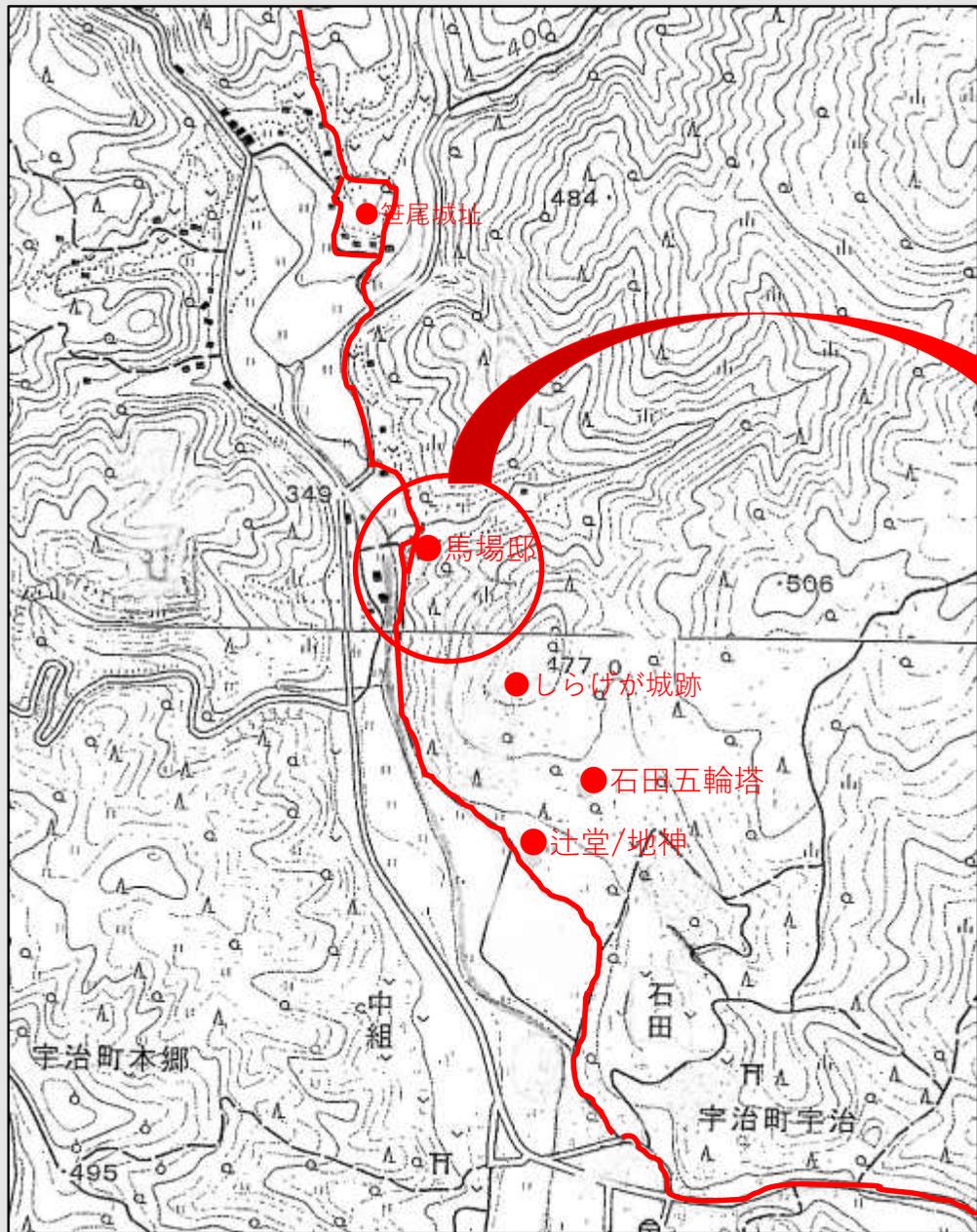
⑧吹屋往来「とと道」北部ルート探索 一馬場鉄太郎邸庭先通過地点

宇治を出て辻堂、石田五輪塔、しらげが城跡等の脇を北上すると「とと道」案内板が現れます。それに従い小さな水路沿いを北上するのですが昭和の室戸台風で川筋が荒れてしまったために、いかにもとって付けた様なルートです。

暫くすると踏み跡は島木川沿いになり、堰堤が現れ、ここで右手の川岸の急斜面を2mほど登ります。そこは馬場さんのお宅の庭で、今はお住まいではないのですが無断で横切るにはいささか気がひける場所です。



高梁のメンバーが改めて川のどちら側を歩いていたんだろうと調べたところ、堰堤周辺に川を渡る「とびそ」の遺構が見られ、両岸には川から岸に登る石積みの階段などがあるのも分かりました。かつてはそれを使って川の水量次第で適切なルートを選んで進んでいたのだろうと推測されました。



馬場邸西の出口



馬場邸



堰堤



堰堤上流の眺め



島木川左岸の階段



堰堤下流のとびそ全景



島木川右岸の階段



同上／下流から

馬場邸周辺ルート



上流

島木川堰堤

下流

とと道再開発にはイロイロありましたが、高梁川流域学校からの呼び掛けに応じてたまたま知り合った沿道のあちこちのメンバーが笠岡、吹屋を繋げるという目標を共有して5年、以上お伝えした「8つのこぼれ話」の様な探索を繰り返して60kmの道が一本に繋がりました。

無論沖仲仕たちはこれ以外にも様々な道をたどったことでしょうが、人が自分の力だけで物を運んだ一つの大きな舞台のイメージがこれで定着できたのではないかと思います。動物の中で唯一「直立二足歩行」を得意とする「ヒト」にとって「道」は切っても切れない何よりの相棒です。ところがその道が今ではほとんど車のための道に変わりつつあります。山坂を直進するのではなく、蛇行してゆるやかな傾斜の、無駄に長い距離を自分ではなく車で辿るのです。おかげでヒトはその存在の最大の特徴である直立二足歩行の基盤を失いつつある、つまりは自分を少しづつ失いつつあるのではないのでしょうか？

そこに現れたとと道探索。長いルートを特定したのは路傍の道案内人たる石の道標達でした。布東公会堂の前には元禄10年（1697）の道標が有り、左右の「なりわ道」と「まつやま道」を示した文字が刻字されています。かつての人々はこの道標と会話をしながら長い距離をひたすら歩いたものです。

道と道標と二足歩行。ヒトの根源を支える環境を今後ごく一部ながらも守ってゆこう。探索の結果ちょっと大げさな思いが湧きました。

2017年に会を組織した折に、この事業を何年やろうか？と話し合いました。事務局からの「5年」という控えめな提案に対してアッパーシニアからは「10年」という対案が出されました。それから今年で既に5年たっています。ということは「道と道標と二足歩行」を守るために、あと5年は毎年草刈りをしなければいけません。また、歩いていただくメンバーがいないと意味がありません。

この報告を読まれて興味を持たれた皆様、いつか「とと道」を一緒に歩きましょう。草刈りへのご参加も大歓迎です。



雨の吹屋



笹畝坑道内部